

第 29 回 2014 年 9 月 24 日(水)

ゲスト 西村嘉郎 (朝日放送 元社長 現関西民放クラブ会長)

テーマ トーク人生路線貫く 「公開番組と視聴者参加番組」

～「ただいま恋愛中」「プロポーズ大作戦」～

#### 主な内容

- ◎演芸・バラエティー番組の制作に専念
- ◎笑いの文化、視聴者との結びつき 関西の娯楽番組の特徴
- ◎ABC の視聴者参加型番組の原点 「漫才学校」「漫才教室」「夫婦善哉」
- ◎ラジオ番組「蝶々・雄二の夫婦善哉」1 回目の放送は昭和 30 年
- ◎トーク人生路線 定着 「ただいま恋愛中」制作余話
- ◎若者ターゲットに「プロポーズ大作戦」 司会は西川きよし、横山やすし
- ◎人気番組の終わる時期 「さようならプロポーズ大作戦」
- ◎知識を問うクイズ番組「パネルクイズアタック 25」
- ◎時代を切り取る特別番組「新婚さんいらっしゃい！22 年のアルバム」
- ◎関西人のサービス精神が支える 「探偵ナイトスクープ」
- ◎「戦争」の描き方に変化 NHK「朝ドラ」のテーマは
- ◎関西の民放局 自社制作比率 大幅に減る

司会 本日も曇り空、蒸し暑いお天気ですが、ようこそお越しいただきました。今日は関西民放クラブの西村会長にお話をいただくということで、聞き逃すと、本当にえらい損だという話です。ただ、西村さんがどんなバックグラウンドをお持ちなのか、興味のあるところでして。非常にご苦勞もなさったようでございます。今日は会長に珍しい音源をお持ちいただきました。後で、お聞きいただきます。改めてご紹介いたします。元朝日放送社長、現在、関西民放クラブ会長の西村嘉郎さんです。

西村氏 よろしくお願ひします。

司会 私は実は朝日放送が事務局をもっておられます、大阪日伊協会というところのメンバーなんです、2か月に1回ぐらい、昼食会&講演会というのをロイヤルホテルでやっておられます。前任の柴田会長、その後の会長として西村さんが会長をしておられましたので、その頃から存じ上げておりました。その後、民放クラブで毎月お会いするようになってから、段々とお人柄というのが、分かってきました。皆さん、ご存知かもしれませんが、プロフィールをご紹介します。1958（昭和33）年4月、朝日放送に入社されまして、ラジオ編成部運行課。スタジオ管理とか放送運行とかやっておられました。1964年に、報道部スポーツ課、現在のスポーツ局に異動になります。その前に、1960年、昭和35年の3月に、在職中に関西大学の文学部を卒業しておられます。1964年の報道部スポーツ課のときが、ちょうど東京オリンピック。続きまして、1970年、今度はテレビ制作局に移られます。このときが、大阪万博。そして1992年、平成4年にテレビ本部のテレビ制作局の制作部長になられまして、翌々年の94年、平成6年に、テレビ制作局長。続きまして、翌年はテレビ編成局長。この年に阪神淡路大震災が起きて、後、異動とお伺いしました。97年に役員待遇になられまして、CS・サテライトABCの社長をお務めになります。それから99年、平成11年、朝日放送の取締役として、テレビ営業、広報、事業、シンフォニーホール事業、国際室長を担当されました。そして、2001年、朝日放送の常務取締役。そして2002年、平成14年に朝日放送の代表取締役社長になられまして、2008年までお務めになりました。平成7年までの31年間、現場一筋に歩いて来られました。在職中に大学をご卒業ということで、私はエリート入社で、エリートコースで、そしてエリート社長という風に思っていたんですが、なかなかご苦勞があったようです。それから全て大きな出来事、オリンピックとか万博ですとか阪神淡路大震災とか、そういった年に異動しておられて、非常に偶然とはいえ、そのとき、そのときで大きなお仕事ご待ち受けていたのではないかなという風に思います。そのあたりからお話を伺わせてください。

<演芸・バラエティー番組の制作に専念>

西村氏 それでは、どうぞよろしくお願いいたします。メディアウォッチングで公開番組と視聴者参加番組というテーマで喋って欲しいという話がありまして、31年間、制作現場で主に公開番組、その中でも視聴者参加番組を手がけてきたということで、今日はそのお話をさせていただきます。出野さんから、少し経歴を喋れということなんですが、昭和12年の生まれで、今年77歳です。僕は7歳のとき(4人兄弟)、親父が死にまして、母親が小学校の教師になって、我々を育てたということなんです。そんなことで、高校から大学に入るときに受験に失敗して、浪人をしようと思っていたら、中学校の校長が「そんな贅沢なことせんと郵便局へ行って働け」と校長の紹介で郵便局へ。実は1年勤めているんです。その後、知り合いが朝日新聞大阪本社にいまして、僕を編集局の調査部というところに紹介してくれました。今で言うデータベースを作るような、記事のデータを全部そこで保存するところに行っておりました、夜はそこから大学に通っていました。その内に朝日放送が高校卒業の資格で採用試験があるというので受けましたところ、入社が決まって、昭和33年の4月に朝日放送に入りました。会社に入ってから私の異動先は、出野さんから詳しくお話をいただいた通りなんですが、不思議なことに、世の中の大きな出来事のあるときに僕は職場を変っているんです。東京オリンピックから万博が終わってテレビの制作に移り、阪神淡路大震災が起きてテレビ編成に変わるという風な、非常に人に喋りやすい異動をしております。途中、CS放送のサテライトABCというところへ社長として行きました。ちょうどCSが激動の時期で、既存のプラットフォームはスカパーフェクトTVに、二つ目のプラットフォームとしてディレクTVが参入するということが、衛星放送に夢を抱いた新しい放送事業者が現れた時代でした。つまり、ニューメディアの時代でした。

CS放送は毎日放送が先に手がけられていましたが、我々サテライトABCもずっと赤字を垂れ流していましたが、なんとか単黒にせえということで出向させられました。CS放送はコンテンツを有料で見せていくわけですから、視聴者に我々の放送するものを買っていただくという立場になって、よりコンテンツの重要性をそこで学びました。

ざっと会社の中ではそういう動きをしてきました。さっきもお話しましたが、昭和39年の東京オリンピックの年に、今で言うスポーツ局に行きまして、その後はテレビの制作、テレビの編成に移るまで足掛け32年、その間、ほとんど番組を作ることに携わってきました。ジャンルとすれば、どちらかというと演芸バラエティーのほうに偏っています。ドラマを1本だけ作らされたんですが、二度と僕にドラマをやれということは誰も言わなくて。ただ不思議と無手勝流でやったのが、その年の芸祭の優秀賞をもらった。これはフロック(まぐれ当たり)です。

<笑いの文化、視聴者との結びつき 関西の娯楽番組の特徴>

それでは本論に入りたいと思います。公開番組と視聴者参加番組は、関西で一番得手とする番組のジャンルだと思います。入社したのは昭和 33 年、当時の時代状況は、もはや戦後ではないという時代でした。朝鮮戦争による特需があつて経済的にも回復してきて、昭和 30 年から電化時代に入っていきます。冷蔵庫があり、掃除機、洗濯機、そこに蛍光灯が出てきた。戦争中に悲惨な思いをしてきた我々にとっては、日々、うきうきとしていた時代だと思います。そんな中で大阪 BK(NHK)、それから OTV(大阪テレビ)のテレビ局がスタートしていました。昭和 33 年には、テレビは 100 万台を突破したという時代だったと思います。ただし、まだまだテレビよりはラジオが全盛の時代でした。それ以降のテレビ番組、特に娯楽番組を振り返ってみると、やっぱりラジオ時代に工夫して作られた番組がベースになっているような気がします。

民間放送ラジオが出来たのは昭和 26 年 9 月 1 日。まず中部日本放送 CBC(名古屋)が朝の 6 時半に電波を出して、同じ日のお昼に新日本放送 NJB(大阪)、今の毎日放送が放送を始め、朝日放送(ABC) は 11 月に開局しています。

大阪では NHK(BK)、それから新日本放送、ABC とこの三つが、競い合つて番組を作っていた時代です。辻一郎さん(元毎日放送)のお書きになった「私だけの放送史」を読ませていただくと、昭和 26 年に民間放送、ラジオが出来て、最初に民放のスタッフは何を考えたかという、これまで NHK にしか合わせていなかったダイヤルを、いかに民間放送のほうに合わせさせるか、そのことを一生懸命考えて工夫したんだと書かれております。

特に娯楽番組について、いろいろな工夫がされている。ニュースを中心にした NHK、そして新日本放送も最初の頃は割と教養的な番組を重視されていたけれども、視聴者は皆、多様な番組を好んでいるわけで。今までのような大本営発表のものではなくて、新しい時代のラジオ番組を望んでいたんでしょう。ちょうどゴールデンタイムに、新日本放送はクイズ番組をべたっと並べるとか様々な工夫がされております。やっぱり楽しい番組を皆さんに提供していこうということで、関西のお笑いをベースにした番組作りが始まっていきます。当時、NHKは「お父さんはお人好し」が、大人気で。そこへ新日本放送と朝日放送が、それぞれ専属タレントを抱えて番組作りをしています。

この関西の娯楽番組の作り方には、大きく言いますと、三つ特徴があるんですね。まず漫才、落語といった大阪の笑いの文化をベースにした番組の作り方。それから二つ目は、関西人の特徴を番組に生かすため、視聴者を参加させることです。これのもう一つの意味はギャランティーをあんまり払わなくてすむような番組作りです。特に東京から文化人を呼んだり、高名な俳優であるとか、芸人を

呼ぶとあご足(ギャラのほかに食費と交通費)が付いてくるということで(経費がかさむ)。そこで関西のお笑いの漫才さんとか落語家、そういうものを中心に、そこへ素人も一緒に入れて番組作りをするということになる、ここがその視聴者参加の番組の始まりなんです。これは辻さんの本にもありますが、NHKの「二十の扉」とか「話の泉」とかいろいろ人気番組がラジオで流れているんですが、全部それ文化人ですよ。新日本放送がクイズ番組をやったときは全部視聴者参加ですよ。視聴者にクイズを答えさせる、ということでやっぱりラジオが先鞭を付けてそういう番組の作り方をしてきた。この視聴者を参加させるということが二つ目。それから三つ目は、公開で番組を作る。これは開かれた放送局ですよ。

、民間放送のラジオが出来て、どういうことをやって番組を作っていくのかというのを、公開で番組を見せますよという、新しいメディアに対する関心度が非常に高いものですから、だっと押し寄せて、あのお笑いさんの顔が見たい、司会者の顔が見たい。アナウンサーってどんなスタイルで舞台上に立っているのか見たい。ますますラジオが親しく感じられて、手の内を全部さらけ出す公開番組に、非常に新鮮な形で視聴者がやって来る。というわけで、関西のお笑いの文化をベースに視聴者を参加させる、それから公開で作る。これが三つの特徴です。

公開で番組を作るということは、もう一つ大きなファクターがあって、それはスタジオがないということなんですね。自社のスタジオで、そういうものを作るスタジオがあまりなかった。そのために公開でいろいろな劇場、ものの本を読みますと、梅田劇場で映画と映画の間に公開番組を作っているんですね。朝日放送は、今のフェスティバルタワーの中之島のところに、もともとスケートリンクが戦後出来て、それを夏場は、ラジオの公開ホールにしたんですね。アサヒ・ラジオホールと言って、3000人入ったといえます。

あとで今残っている「夫婦善哉」の1回目の放送のテープを、お聞かせしたいんですが、実はアサヒ・ラジオホールで収録されたものです。

後々、テレビも、スタジオがないものですから、劇場中継とか「番頭はんと丁稚どん」というものすごい人気のコメディアーがありましたけれども、全部どこか劇場でやっているんですよ。

—— 南街ですわ。

<ABCの視聴者参加型番組の原点 「漫才学校」「漫才教室」「夫婦善哉」>

西村氏 南街劇場ですか、南街で撮っているんですか。それも公開で見せながら、楽しませながら番組を作るとこういうことですね。朝日放送に三つの、後々、影響を与えたラジオ番組がありました。一つは昭和29年に出来た「漫才学校」。これは学校のスタイルで番組を作っているわけで、生徒がいて先生の前で宿題を発表する

という風なスタイルですけれど。校長先生はミヤコ蝶々、それで美人の教師に森光子がいて、生徒が夢路いとし・喜味こいし、それから秋田 A スケ・B スケとか。小使いさんとして鐘鳴らす、南都雄二、男前のユウさんというのが出ている。社会科の時間とか国語の時間とか与えられた宿題を発表するのだが、それがとんちんかんで、漫才のような不思議なコントになっている。これは全部、秋田實が書いているわけですね。これが爆発的な人気だった。

毎日放送の専属でもありました構成作家の足立克己さん(1932年～2000年)、漫才作家。この人が書いているんですが、やっぱりいろいろな意味で後々、テレビ番組、テレビの関西発の娯楽番組に影響を与えたのは「漫才学校」だろうと言っています。非常に面白い爆発的な人気を呼んだ番組。この番組が終わって「漫才教室」というのが出来るんですが、これも非常に大きな影響力を与えた番組の一つなんです。

「漫才教室」は素人参加番組なんですね。つまり視聴者参加、素人参加のこういう芸を競う番組の中には、NHK が戦後すぐ「のど自慢」をやっているわけですね。

「のど自慢」は歌を競う。この「漫才教室」は、笑いの芸を競うわけです。ここに、桂枝雀、それから後々、“天才漫才”と言われた横山やすし、桂三枝、そういったメンバーがこの「漫才教室」に素人参加して、そこから芸人になっていく。だから関西の芸人を育てたラジオ番組という意味で、この「漫才学校」と「漫才教室」というのは関西の放送文化についていろいろ大きな影響を与えたものと言われています。

もう一つは、関西発の最も得手とされている番組、視聴者参加型トーク番組ですね。この代表的なのが「夫婦善哉」です。実は、教養番組で「婦人クラブ」とかいう番組があったらしいんですが、その雛祭り特集に“男の七つの大罪”、飲酒であるとか、浮気であるとか、あるいは暴力であるとか、そういう男の大きい罪を公開の場で裁く。4組の夫婦が登場して、女性のほうから「うちの亭主は酒飲みで困っています」というのを罪として裁く、あるいは浮気であるとか。

——— ギャンブルとか。

——— <ラジオ番組「蝶々・雄二の夫婦善哉」1回目の放送は昭和30年>

西村氏 ギャンブルとかそういうものを裁く。本当はその番組はアナウンサーが司会をしていたらしいんですが、スペシャル番組であるし、あんまり、マジにこれをやってもしょうがないから、もうちょっと楽しく“男の七つの大罪”を裁判にかけるという楽しい番組を作ろうということで、それまで「お笑い街頭録音」という番組のプロデューサーであった上宮檜生氏に「実はこの司会、誰にしようか悩んでんねんけど」と言うと、「それはミヤコ蝶々やろう」ということで、1本だけのスペ

シャル番組としてやっただけなんです、それがバカ受けしてですね、是非この企画をレギュラーでやりましょうということになって、「夫婦善哉」が生まれたんです。実は今日、1回目の放送・昭和30年の6月13日の録音を持ってきました。この番組は、最初はラジオからスタートして、途中でテレビの放送に切り替わります。それでは今日、時間が少しあります。ちょっと尺がありますけれども、1回目の放送で、それなりの味わいがありますので。少し退屈でしょうが、聞いていただきたいと思います。

### 「蝶々・雄二の夫婦善哉」第1回放送、1955（昭和30）年6月13日録音より

前コマから始まる（男性アナウンサーのかしこまった声のみ、音楽は無し）

バラの花によく似た名前の薬が、皮膚病にととてもよく効くというので、今大変な評判になっているのをご存知ですか。

その名は「バラマイシン」。詳しく言えば「バラマイシン軟膏」でございます。（約1分 あと省略）

テーマミュージック（“とにかく夫婦というものは---” 蝶々・雄二の台詞入り）

男性アナ 前説（同じく、正統派のアナウンスメントが流れる）

今日はアサヒ・ラジオホール（中之島）からでございます。

この番組は蝶々、雄二さんの司会で聴取者の皆さんの中から4組のご夫婦に出ただいて、ご家庭のよもやま話についていろいろと話し合っていたく30分です。

（前説の中に、舞台の出場者の座り位置、出場者への記念品、夫婦茶わんと番組提供小野薬品の医薬品セットなどの説明がBG音楽なしで、約2分間にわたって行われる。

そして「では早速、司会の蝶々雄二さんにご登場願ひましょう」で大きな拍手（効果音で流したような音質）が会場に流れる。

蝶々さん （第一声は）

今晚は、おいでやす。ええ、いらっしやいませ。

今日から始まります、この「夫婦善哉」と申しますが、家庭円満、夫婦和合、どうしたら、夫婦仲がうまいこといとかということ、みんな寄って、研究しようやないかというような、実に雄大な、国際的な時間であります。（笑い）言うとかないと分からへんから。

(このあと、雄二さんも絡みながら、二人の巧みな誘導で  
出場者から本音を引き出していく。会場は笑いが絶えない)。

西村氏 まあ、なかなか、アナウンサーのコマーシャルの読み方といい、それから司会の蝶々、雄二さんの掛け合い漫才というか、あの息で視聴者も楽しみ、それからかなり際どい夫婦の話もあそこでオブラートに包みながら会話して行って、「あの夫婦、我々夫婦と同じようなことやとるんやな」とか、いろいろ「夫婦善哉」を聞きながら、よその夫婦の生活を垣間見るというか、つまり覗き趣味ですけれども。そういう中で、番組はどんどん視聴者の人気を得て、それまで「お父さんはお人好し」がトップだったのを、スタートして2年ぐらいで抜いてしまうという状況になります。ちょうど民間放送連盟の連盟賞というのが、ラジオがスタートして、しばらくして出来て、何年目かに「夫婦善哉」が娯楽部門の優秀賞を取るんです。そのときに作家(直木賞)の安藤鶴夫さんが書いているのに、「漫才という大阪の庶民の芸を大切にしながら、それをうまく番組化して、庶民との間のつながりを番組の中で生かしていくという、こういうトークショーは非常に優れたアイデアである」という風に絶賛したということです。

【注】\*ラジオ「蝶々・雄二の夫婦善哉」

1955(昭和30)年6月13日～1971(昭和46)年3月29日、  
月曜日、21:30～22:00 放送回数 825回

\*テレビ「夫婦善哉」

1963(昭和38)年8月2日～1975年(昭和50)年9月27日  
金曜日(後に土、日)、22:30～23:00 放送回数 633回

\*ラジオ「漫才学校」

1954(昭和29)年1月9日～1956(昭和31)年5月5日  
土曜日 19:20～19:50

\*ラジオ「漫才教室」

1957(昭和32)年7月30日～1961(昭和36)年7月30日  
火曜日 19:00～19:30

<トーク人生路線 定着 「ただいま恋愛中」制作余話>

これがベースになって、朝日放送はいくつかのトーク番組をここから考えていきます。一つは「おやじバンザイ」。続いて「ただいま恋愛中」、それから「新婚さんいらっしゃい!」「プロポーズ大作戦」「ラブアタック!」という風に、視聴者参加のこういうトーク番組が次々と考えられて作られていくのです。夫婦があって、お父さんがテーマになって、それから恋愛中のカップル、それから新婚さん、



プロポーズ大作戦といった風に、人生そのものをピックアップしながら番組化しようということで、われわれ朝日放送では、「トーク人生路線」という風と呼んでいました。僕はそのうち、二つの番組のディレクターをやり、プロデューサーをやっています。一つは「ただいま恋愛中」という番組です。もう一つは「プロポーズ大作戦」。これは後半のところをプロデューサーとして数年やりました。それぞれが長寿番組で、「新婚さんいらっしゃい！」は1970年に出来て、いまだ現役で、桂三枝、山瀬まみで日曜日の昼12時45分からの番組は続いているということでもあります。

今日は、その僕の経験した「ただいま恋愛中」の中からエピソードをいくつかお話したいと思います。ちょうど万博の年（1970年）に、この「ただいま恋愛中」がスタートします。タイトルの通り、恋愛中のカップルが出てきて喋るというトークショーなんです。司会は、笑福亭仁鶴と西川きよしです。ここになぜ横山やすしが入っていないのかというと、当初はメンバーに入っていたのが、タクシードライバー殴打事件というのがあって、やすしが謹慎を食らった。それで仁鶴・きよしでこの番組がスタートします。僕が担当したのはスポーツから制作に移った1970年11月から。番組は、その年の1月にスタートしていますから、だいたい半年をちょっと過ぎて、やや軌道に乗りかけたかなという頃です。今申し上げましたように、この番組のテーマは恋愛中のカップルが出てきて、そこで自分たちはどんな風に付き合っているかを喋るというのですが、1970年頃はまだまだ社内恋愛はご法度みたい時代で、女性が彼氏と付き合っているというのはあんまりオープンにしないような時代だったんです。社内では「こんな企画は成立しない」のではと言っていたらしいです。企画者は、澤田隆治氏です。「てなもんや三度笠」をやったり、多数のお笑い番組をプロデュースし、テレビ草創期から今もなお現役で活躍されています。蓋を開けてみると、結構応募者があって、僕は2代目のディレクターですが、視聴率は半年ぐらい経って14~15%이었습니다。1年ぐらい経つと、もう20%を絶対に切らないという視聴率を取っていましたから。土曜日の23時からの30分番組です。なぜ20%ぐらいに一気にいき出したかということなんですが、仁鶴ときよしさんですから、面白いわけですよ、そのときの笑福亭仁鶴というのは、絶大な若者の支持を得ていて、ABCホールは620~630人が入るんですが、毎回超満員になっていました。仁鶴が舞台に現れた途端にわーっというような人気を得ていましたから、当然、仁鶴・きよしの人気で視聴率が取れるということもあるんですが、やっぱり20%を下らないというのはそれなりに理由があるんです。考えてみれば、これはその当時の恋愛ハウツー版だったんです。若者向けのそういう情報雑誌も全くない時代ですから、初めて彼女をどこかに誘うときにどうしたのか、何をプレゼントしたのか、デート代としてどれぐらい使っているのか、デートスポットはどこなのか。それから初めてのキッス

はこういう風にしたかと。初めてのキッス、これは必ず聞くことになっていたんですが、非常に困ったのは、笑福亭仁鶴さんは昭和12年生まれ、僕と同世代なんですが、テレビで初キッスなんて聞けない、キッスという言葉をやよう言わないんです。どう言ったかという、「初めてのベーゼは」って。

—— 奥ゆかしいですね。

西村氏 その横で西川きよしさんが、「キッスのことを聞いとるんじゃ。正直に言わんとあかんぞ」と目剥（む）いとった。つまりこの関係で非常に和やかな雰囲気の中、恋愛中の出来事、様々なエピソードが語られるということです。不思議なのは、トーク番組の司会者の技量というのは、関西と関東では随分違うんです。僕はその後、萩本欽一さんの司会で、JNNの共同開発番組「日本一のおかあさん」というトーク番組の制作に関わりました。全国各地をJNN系列で持ち回って作るんですが、萩本欽一さんもなかなか鋭いエンターテイナーですが、関西の司会者にはとてもやないけど及ばない。というのは、出場者から本音を語らせられないんですね。どうしても上滑りになってしまって、番組に味わいが出ない。関西のトーク番組はなぜ面白いのかというと、やっぱり本音で語らせるように司会者が持っていつてしまう。出場者が何かエピソードを喋ります。それを司会者が受け取って、それを一段違う形に膨らませて、もう一度出場者に返すという。この作業の中で話が想像以上に膨らんで、違う方向に行ったり、様々な展開をする。「新婚さんいらっしゃい！」でも、桂三枝はそのへんのテクニックを少なくとも数十通りは持っていると思いますが、それとエピソードは本番の中ですぐ出てくるものではないのです。出場者の予選会を丹念にやって、出場させようと決めた段階から細かな取材がいっぱいあって、いくつかのネタを司会者に与えて、その中の二つか三つをピックアップして、それを膨らませて番組化する。だからその出場者を決める予選会が一番大変なんです。僕も「ただいま恋愛中」の予選会で全国行脚しました。一番人気のときは、大阪で土曜日に予選会をしたら50組ぐらい来るんですが、それをば一つと聞きながら落としたり残したりという。つまり予選でエピソードをいかに拾うかで番組は成り立っているんですね。そこへ司会者のテクニックがプラスされる。

—— 予選会で、話を聞くのはどなたなんですか。

西村氏 僕と構成者、ディレクターと構成作家、二人です。

—— なるほど。そうするとディレクター、構成者がまずどんな風に話を引き出すかと

というのが大事なんですね。

西村氏 そうですね。

——— ただ当たり前話を聞くだけのディレクターでは、番組が面白くなっていかないというのはありますよね。

西村氏 ですから構成作家とディレクターで、常に漫才のようなことをやりながら話を引き出す。一つこんなのがありまして、名古屋のカップルで、男性が非常に大人しくて、女性がもの凄くその男に惚れているんですが、男性はおとなしいから手も出さない。女の子はイライラして、ある日、名城公園に自分から連れて行って、無理やり彼女から積極的にキスをしたんです。やっと男性もいいムードになっていたら、手がスカートの中に入ってきたって言う。「この人、意外に積極的。こういう一面があったんや」と思って、ふと我に返って、この手はどうしたんやろうと、その男性の手は二つ自分の背中にあるのに、もう一つ手がある。それは、覗きの男の手だったという。非常におとなしい男性と積極的な女性の恋愛のエピソードとか、親に反対されている恋愛とか、つまり恋愛面白ハウツー版ですよ。構成的にも成功したのは、そういうカップルの恋愛談議を聞いた後に当時徐々に人気が出だした「占いのコーナー」があって、今後の二人の行く末を占う、一番人気だったのは、田中佐和の霊感占いでした。

——— そうでしたね。

西村氏 田中佐和が目をつぶって、ポンポンと拍手を打って、二人をイメージしながら占うんです、「仲睦まじく、二人で寄り添って歩いているところが見えますが――。そこにいきなり突風が吹いて、二人は引き離されます」とか、そのうちに彼女も自分で楽しんでいる風で、ますます演出が強くなっていきました。まあ、しかし、足掛け8年、369回。この手の番組としては非常に長く続いた。大淀に新社屋建てたときに、やっぱりホールを作らないとあかんということで、ABCホールを作りました。こういうトーク番組もコメディもここで作るということで、やっぱり関西発の娯楽番組を自社で作っていこうという気運に燃えていた時代でした。

<若者ターゲットに「プロポーズ大作戦」 司会は西川きよし、横山やすし>

その後、僕は「プロポーズ大作戦」を担当することになり、しばらくプロデューサーをやりました。「ただいま恋愛中」が当たったものですから、次はやっぱり若者をターゲットにした番組をもう1本ということで「プロポーズ大作戦」が生ま

れます。これは横山やすしさんが復帰した第 1 作だったと思いますが、西川きよし、横山やすしコンビが司会を担当。番組の構成としては、前半はあの人にもう一度会いたい、例えばどこかに旅をしたときに親切にしてもらった男性に恋をしたんだが、なかなか名前を聞き出せなかったので、あの男性ともう一度会いたいとか、人探しを中心にしたコーナー。間にアイドル歌手の歌を挟んで、後半はフィーリングカップル 5 対 5 という風になっていました。前半の人探しのコーナーは桂きん枝が愛のキューピッドという役割で、この人を探して欲しいという依頼に基づいて、全国各地あるいは世界へでも飛んで行って、その相手を探し出す。それで放送の録画のときに果たしてその相手があるかどうかは分からない。「神の前に身を委ねたる、××の願いを叶えたまえ」って横山やすしが呪文をとねえると、カーテンが開いてその人物が来ているかどうか、ご対面のスタイルになる。後半はフィーリングカップル 5 対 5 です。これは女性が 5 人、男性が 5 人でいろいろな質問を投げ合っていて、フィーリングが合った人同士が最後は結ばれるかどうかという、トーク&ゲームですね。1970 年ぐらいから、若者はテレビで遊ぶという時代に入っているんです。テレビは遊ぶ道具に使うという時代かなと。フィーリングカップル 5 対 5 はまさにその通りで、合コンの先駆けというか、合コンパの先鞭をつけたという感じですかね。今はどうか分かりませんが、数年前まで、学園祭なんかに必ずこのフィーリングカップルが登場していた。

——— 最初は紐であったものが機械になったわけですね。

西村氏 はい。それでこれは最初、5 本の色分けした紐を皆がそれぞれ持っていて、自分の気に入った人のを引くと、向こうも引いていけばラインが結ばれるという仕掛けでした。

——— 覚えています、それ。

西村氏 それでちょうど 1975 年にネットチェンジ（東京キー局が NET、今のテレビ朝日へ）がありまして、そのときに「プロポーズ大作戦」はローカル番組から全国ネットに昇格、火曜の夜 10 時に全国ネット放送される。そのときにフィーリングカップル 5 対 5 は、洗濯の紐じゃあかんやろということで電飾に変えたのです。

【注】「プロポーズ大作戦」

1973 年 4 月 2 日～1985 年 3 月 26 日 放送回数 614 回

月曜日 23：37 から 30 分

1974 年 1 月から土曜日 23：15、45 分、

1975 年 12 月から火曜日 22：00、54 分

—— 何かものの本によりますと 1000 万円ぐらいかかったと。

西村氏 そういう風に言われています。1000 万円かけた。それから後半のフィーリングカップルも、女性陣・男性陣をどういう組み合わせで出すか、どういう質問の応酬をさせるかということも全部、練りに練って作られていましたので、時間のかかる番組でした。全国を回りながら大学、もちろん参加したいという申し込みも多いんですけど、そこへ行って予選をするという風な、相変わらず視聴者参加番組の制作テクニックというのは、「夫婦善哉」以来、ずっと伝授されてきていて、いまだにそれは「新婚さんいらっしゃい！」で踏襲されていると思います。「プロポーズ大作戦」は1973年にスタートして、1985年に番組を終了するんです。なぜ番組が終了したかということなんですが、一つは前半のプロポーズコーナーの申し込みがなくなってきた。もう旅先で出会った男に住所も名前もよう聞かんというような女の子はおらへん。男性の方も気に入った女性がいたら、電話番号を聞いたり、今度どっかでつきあってくれとか、もうストレートになって、わざわざ愛のキューピッドでもないやろと。

—— 成り立たなくなってきたんですか。

<人気番組の終わる時期 「さようならプロポーズ大作戦」>

西村氏 だんだん応募者がなくなって、成り立たなくなってきたんです。「テレビは時代と添い寝する」ということを言った人がいます。フィーリングカップル 5 対 5 はまだ人気を博していましたが、前半のプロポーズコーナーが、旬を過ぎたわけですから、終わらざるを得ないということになった。皆さんも経験されていると思いますが、番組が終わるといふときほど寂しいことはなくて、しかもそれはスタッフにもタレントにもプロダクションにも伝えないとあかんということで、これほど鬱陶しい話はないんです。僕はもうこの「プロポーズ大作戦」は、番組が終わることをお祭りにしようと考えました。12 年続いて十分使命を果たした番組ですから。新聞記者の皆さんにも、いついつでこの番組は終わりますと予告しました。それまでの間「さようならプロポーズ大作戦」という企画で、初めて番組の終了するのを楽しみました。そういうことでも「プロポーズ大作戦」は思い出が強いんですよ。

—— カウントダウンをさせたわけですね。

西村氏 そうそう、カウントダウン。番組というのは一度始まったら必ずどこかで終わる

わけですから、その終わり方が実に難しいんですよ。それから「ただいま恋愛中」のほうで忘れていた話があるんです。番組は大体 20 数%という視聴率の好調さを維持していたんですが、あるとき、京都の山科警察から電話がかかってきて、朝日放送の「ただいま恋愛中」に出場した男を結婚詐欺で捕まえた。本当に出たかどうか確認したいというので、確認したらほんまに出ているわけですよ。それはある旅行会社の添乗員をやっていた男なんですが、結婚詐欺常習で、一緒に出ていた女の子もだまされたわけですね。そういえば、放送が終わった後、一般の視聴者から、「ただいま恋愛中」に出た男について、お話がしたいという電話が何遍かかかっていた。そういうのは無視してやっていたんですが、結婚詐欺で捕まったわけですね。毎日新聞の夕刊に、「仁鶴もだました結婚詐欺」というタイトルで結構大きい記事が載りまして、その頃、女性週刊誌がぼちぼち出だした頃で、女性週刊誌の取材が殺到して、特に結婚詐欺については、女性週刊誌の格好のネタなんでね。どんどん書かれて、ところが、その結婚詐欺が週刊誌にいっぱい出た後、視聴率が、なんと 33. 何%。高視聴率というのは純粋に番組が面白い、中身があるということは当然なんです、こんな形で視聴率というものは変動するものであると非常に不思議な思いをしました、「仁鶴もだました結婚詐欺」でした。ところで、視聴者参加番組といえば、トーク番組以外に、関西ではやっぱりクイズ番組も作りとしては非常に独特の作り方をされている。これは特に毎日放送ですよ。「アップダウンクイズ」に始まって、「がちり買いまショウ」「ダイビングクイズ」様々ありますよね。あれ、なんでクイズ番組が多いんですかね。

—— 金がかからなかったからじゃないんでしょうかね。

—— 共通していますね。

<知識を問うクイズ番組「パネルクイズアタック 25」>

西村氏 それで朝日放送もやっぱりクイズ番組を作らないと、ということになって、「三枝の国盗りゲーム」とか「世界一周双六ゲーム」とか、音楽、曲のイントロ聞いただけで当てる「メロディアタック」とか。そういうクイズ番組を作っていく中で、「パネルクイズアタック 25」というのがスタートするのです（1975 年～現在、）。これは児玉清さんに司会をお願いして、オセロゲームを、変形してパネルを取り合うクイズ番組ですが、今、純粋に知識を問うクイズ番組というのは、もう段々数が少なくなってって「パネルクイズアタック 25」ぐらいじゃないかと思うんですよ。

話は少し横道にそれましたが、クイズ番組にしても、大阪の笑いの文化を底辺にした番組作り、しかもお金をかけないでどう面白く作っていくのか。関西発の番

組というのは皆、それぞれ捻りを入れて変化球を放りながら東京と闘ってきたと、今、おしなべて見ますとそんな風な気がしています。

朝日放送としては、視聴者参加型のトーク番組を得手としてやってきたんですが、今残っているのは「新婚さんいらっしゃい！」(1971年～現在)。その変形として違う形で出来上がってきたのが「探偵！ナイトスクープ」(1988年～現在)。視聴者の依頼に応じてそれを取材し、番組の中でそれを楽しく見せたり、感動させたりというところ。視聴者参加型の番組というのは、時代を映しているんだろうと思います。

僕が制作部長のときに民放祭娯楽部門で「新婚さんいらっしゃい！22年のアルバム」というのを作りました(1992年民放連盟賞・テレビ娯楽部門最優秀賞)。

ヒントは、BBCのドキュメンタリーシリーズです。タイトルはうろ覚えなんですが「赤い旗のもとに・市民の証言による」という。それはスターリンの圧政からソ連の崩壊に至るまでを4作品で描いたドキュメンタリーシリーズなんですが、僕が見たのは「スターリンの圧政」というタイトルでした。ソ連のどこかのコルホーズで、その年は凶作で農民が非常に苦しんでいるときに、ある程度の作物の供出を求められる、あるお父さんは子供達のために作物を隠匿するのですが、それを子供が密告して、父親を売るわけですね。そのドキュメンタリーの映像は、貨車が草原のようなところに着いて、そこへ父親や他の男何人かが貨車に放り込まれシベリヤに送られる。それを呆然と見つめている子供達の映像がある。ソビエト連邦が崩壊した今になってBBCはその密告した子供を探して来て、なぜそのときに父親を売ったのか、子供達はその当時を語るという。すごい取材力でした。僕はそのときに、こんな重いものじゃなしに、時代をもうちょっと違う形で見てみたら面白いんじゃないかなと。例えばキャンディーズの解散がありました、そのときにペンライトを振っていた女の子たちをもう一度探し出して、あの時代は一体何やったんやという風な、そういう市民の証言による時代史みたいなものやってみたらどうかかなと思っていました。

#### <時代を切り取る特別番組「新婚さんいらっしゃい！22年のアルバム」>

ちょうどその時代史にこだわっているときに、民間放送連盟賞の娯楽番組部門の企画につながりました。「新婚さんいらっしゃい！」は22年間、1回目の放送から全部残っていて、その中から話題をピックアップしていくと、新婚、若い夫婦、結婚してから、今の結婚する夫婦までの間にどういいう世の中の流れがあったのかというのを、彼らは証言しているわけですからね。「ただいま恋愛中」の中では「初めてのキスは？」と聞いていたのが、「新婚さんいらっしゃい！」では「お風呂は？」とこう聞いていたわけですね。夫婦はお風呂にどうして入るのかと。最初の頃はですね、神田川じゃないですけど、銭湯に行って、出口で待っていると

なんかですわな。そういうところから内風呂になっていたり、お風呂の入り方が時代とともに様々に変わってきているわけなんです。視聴者参加トーク番組というのは、一つは時代の歴史の証言なんだということですね。今、そういう意味で新しいスタイルの視聴者参加番組が、出てくればと期待しているんですが。関西で作る番組は全部我慢しているんですよ。現在は1クールや2クールで終わる番組が出てきましたけれども、この頃の番組は皆、辛抱強く我慢している。その内に視聴者も馴染んできて、あるいは作り方を少しずつ変えていく中で完成品になっていくみたいなこともあるでしょうが、なかなかそれは待ってられない時代に来たのかもしれない。

—— 同時に伺いたいのが、「夫婦善哉」から始まって、様々な番組が続いてきて、なおかつ「新婚さんいらっしゃい！」と。この中にずっと流れているものって、「フィーリングカップル」にしてもそうですけど、いわゆる男と女の間のエピソードというのは不変であるということなんじゃないかな。

西村氏 そうですね。要するに、テレビというのは、誰に見せるかということ、視聴者ですからね。やっぱり人間を描くというのが基本で、番組を作るということは、そういうことなんだろうと思いますけどね。

< 関西人のサービス精神が支える 「探偵ナイトスクープ」 >

—— それとさつき欽ちゃんとか、仁鶴さんとか、きよしさんの話とか出て来て、いわゆる司会者のほうで話をどうやって引き出すかということもあると思うんですが、例えば西川きよしさんと仁鶴さんが、茨城でこの番組をやって、うまく話を引き出せるのか。あるいは、よく言われる、鶏が先か卵が先かというあれですね、関西人というのは平気で本音を喋るという風になった説と、メディアがそういう風に仕掛けて来て、そういう風なものを醸し出して来たということを使う人もいますよね。ずっと長い間、こういったトーク人生路線をやって来られて、そこから見てきたものというのは、例えば、関西人であるとか、あるいは関西人とラジオとかテレビとかのメディアの関係というのは、どんな風に経験値からご覧になっていますか。

西村氏 やっぱり、関西人が基本的にサービス精神が旺盛だというのは、間違いないことだと思いますよ。それは何か聞かれたときに、つっけんどんな返事しかしないというんじゃないし、聞かれたことに対して、的外れでもいいから、何かをこっから伝えたいという、何か思いやりみたいなものがそこにあるんじゃないかなという気がしています。しかも、その会話は楽しいほど、より良いなど。関東の人



たちに何か聞いたときに、「そんなの知らねえよ」とポンと言われるんじゃないしに。関西の人たちの優しさみたいなものがあるでしょう。そういうものがトーク番組にとっては、非常に作りやすい土壌ではある。特に「探偵！ナイトスクープ」なんかはご覧になっていたら分かると思うのですが、象徴的なのは、例えばピンクレディーの「UF0」をかけて、皆、子供のときに振りを真似したことがあるか？と聞いたら(番組の中で調査)、ほとんどの女の子たちは「UF0」の曲を聞いたとたんからだが動いて振りをやっていますわな。

—— 踊るんですよ。

西村氏 音楽をかけた途端に踊り出すという。ああいう、反射神経的なのりの良さとかそういうものが、関西人の中に独特のものがあるんじゃないかな。

—— そういった、いわゆる関西人の土壌も相まって、こういった番組がずっとヒットして、続いて来られたんですね。

西村氏 そうですね。全国行脚して、全国ネットしていて、やっぱりその土地の人が出ないと、番組って面白くないんですよ。だから、やっぱり関西人ばかりじゃないしに、北海道から九州まで万遍なく、出場者を登場させるようにはちょっと意識しましたけどね。

—— それと同時に全く逆のことなんですけど、それこそ「そんなもん知るかい」と言っていた関東の人たちが、結構、ノリの良い会話になってきたり、それから関西らしい発想をしたり。私は昭和42年に関西に初めて来たんですけど、その頃の東京と比べて、随分、関西ナイズドされてきたんじゃないかなという気がするんです。そのあたりというのは、やっぱりこういった番組の大きな影響があったんじゃないかなという気がします。

西村氏 功罪、両方あるんじゃないでしょうかね。だから、関西人ってあれほど下品ではないという人もいますしね。結局、テレビがそうさせたんだというようなことも言われますが。やっぱり、テレビに出て遊ぶ土壌を作ったのは関西かもしれないね。

—— 昔はなかった、「ぶっちゃけ」という言葉がですね、関東でも平気で今、話されますね。このあたりは、昔は「ぶっちゃけ話」とかっていうニュアンスじゃなくて、

若い人たちが「ぶっちゃけ、何々何々」っていうような言い方をしているんですよ。最近、見ているとね。

西村氏 本音トークですね。

——— それと個人的にお好きな番組が「なんでも鑑定団」(テレビ東京)だと伺いました。

西村氏 はい。最近、自社の番組も見ないといけないんですけど、「この番組を見たいな」と思うのは、そんなにないんです。それでやっぱりBSを見ていますね。それと「この番組は時間があったら見よう」と思っているのは、「なんでも鑑定団」です。以前は、テレビ東京のチャレンジする番組がもう一つありましたが、今は「なんでも鑑定団」が人間臭さがあって、非常に面白い。紳助から変わったけれど、味はそんなに薄まっていないかなと思ってね。非常に面白いですよ。

——— 川越さんあたりは、どんな風に。

——— テレビ東京には長く続いている番組が多いんですよ。要するに、我慢しない局ですから。代表的な局ですから、我慢しないって。それがあつという間に火がついて、長いこと続いているという。テレビ東京は、続いていると、終われないんです。長く続くんですよ。後の番組が出て来ないですから。あれは紳助がこけたんで、かえってタイミングが良かったです。あれは昔の「11PM」じゃないですけど、「EXTV」の一部をネクサスというプロダクションがテレビ局に売り込んで。そしてテレビ東京がスタートして。テレビ東京でいうと、やっぱり「ガイアの夜明け」「ソロモン流」(2005年から放送していたが、今年2014年9月で終了)とか変な訳わかんないタイトルを付けるのが得意ですよ。今は「和風総本家」ってやつね。我慢して我慢して、はまってきました。3年我慢して。あれは勝負。

——— さて、残り時間があと10分くらいになりました。高齢者と放送、テレビの将来なんてことについて、社の代表もなさったお立場から、どんな風に考えていらっしゃいますか。

<「戦争」の描き方に変化 NHK「朝ドラ」のテーマは>

西村氏 僕、まだ地上波は捨てたものやないなと思っていまして。高齢者ほど、テレビはお友達がいいますかね。

——— お友達になりたいところですが、見る番組がないというんですね。

西村氏 だからどうしてもBSのほうにシフトするという格好になってくると思うんですが、やっぱり、「朝ドラ（NHK）」が、あれだけ人気でしょ。「朝ドラ」というのは、あの忙しい最中に、習慣性の問題もあると思うんですが、「朝ドラ」がテーマにしている今のところなんかは、戦前戦中戦後の20年ぐらいのところですよ。数年前から、その時代をずっとNHKがテーマにしているんじゃないかなという気がします。それは昭和30年に東京タワーが出来て、映画「ALWAYS 三丁目の夕日」か。あれぐらいからずっと戦中戦後の昭和20年ぐらいまでの間のところが、NHKがテーマにしている。なんであれなんかなと思ってね。ということは、やっぱり視聴者ターゲットが、その辺が中心になっているということなんかな。

——— そうですね。「あまちゃん」はちょっとね。震災がありましたんで。

——— 今、BSでね、「朝ドラ」が再放送している。7時15分から、岸和田の三姉妹ね（「カーネーション」）、あれをやっている。7時30分からは今、地上波で放送中の再放送。まったく同じ時代ですよ。ちょうど戦前から戦中、戦後にかけての話をずっと。まったく同じ時代をやっていますわ。おっしゃる通りです。

——— 「朝ドラ」から、話が横にそれましたが、最後に、西村さんに何かご質問があれば。

<関西の民放局 自社制作比率 大幅に減る>

——— 大阪ものをネットする場合に、東京は全面協力というわけにはいかなかったでしょう。大阪ものの公開放送みたいなもの。例えば「夫婦善哉」とかね、抵抗もあったんじゃないですか、ある程度。

西村氏 「夫婦善哉」とか「プロポーズ大作戦」「新婚さんいらっしゃい！」「ただいま恋愛中」その辺は全部、全国ネットなんですよ。やはり企画次第でしょう。1970年代には若者のデート番組と言われた「プロポーズ」のほかに関西テレビの「パンチDEデート」もヒットしています。今、新しい形でのそういうトークショーみたいなものは、関西発のものがないんです。関テレも今、制作比率がどのぐらい分かりませんが。ローカルも含めて自社制作率は、40%にいてないと思うんです。それで、ゴールデン、プライムゾーンの中で、皆、それぞれが2枠ぐらいですよ。2時間ぐらいのものと違いますか。2時間ないし、3時間。

——— 昔は4時間30分ぐらい、ありましたよね。

—— 例えば、「SMAP×SMAP」って月曜日にやっているんですが、あれ関西テレビ発なんですけれど、誰もそんなこと思ってないですよ。あれはフジテレビの番組だと皆、思っている。営業は関西テレビなんです。日曜日の枠（夜 9 時～）は「発掘！あるある大事典」のあの“大事件”で取られちゃったんですよ。本当少ないです。

—— 関西局の持ち枠であっても、東京で作っているってことがありますね。

—— 「さんまのまんま」（関西テレビ・吉本興業共同制作）も東京で作っているでしょう。

—— 広田さんのところの「秘密のケンミン SHOW」は読売制作ですよ。あれはやっぱり東京で作っていますね。

—— そうです。

西村氏 ほとんど東京に制作の拠点が移ってしまっている。ちょうど 30 年前、朝日放送 30 周年のときに、記念番組のプロデューサーをやらされたんです。番組対抗で芸を競うみたいな企画でした。紅白に分かれて番組対抗のスペシャル番組を作ったんですが、24 本ありました。12 が紅組、12 が白組で。中には東京制作もあるんですが。天気予報も入れて。そのことを思うと、今、どのくらい自社制作のものがあるのかですよ。やはり自社で番組を作らないとだめだと思う。そうでないと人も育たないし、新しい発想も生まれてこないでしょう。

—— 今日ありがとうございます。この企画が始まりましたのは、我が国の民放史の中で、関西で作られている番組が、いかに良い番組がこんなにたくさんあるかというのを残していこうという趣旨で始まりましたので、今日のお話というのは、非常にやっぱり関西にこだわってお作りになっていた番組のお話が伺えて、大変興味深かったと思います。それから、来年には何か本という形にしたいという風に思っておりますので、その中でも非常にオリジナリティーの高いお話だったと思います。本当に今日はありがとうございます。

西村 すみません。何かとりとめもない話で。

以上